

「人間にとって良質な環境とは」をさぐるために

Introductory Remarks on fundamental Study of Environmental Excellence

岩田 好宏

要旨

人間にとっての「良質な環境」とは何かを明らかにするための手立てを考えるために、人間の起原から現在まで貫かれている人間の「主体—環境」関係にみられる特性から追求することを試みた。その特性の一つとして、人間主体はその身体と道具で環境と関係をもっており、身体を中心として考えれば、「主体—環境」関係は、1) 身体と道具、2) 身体と環境、3) 「身体+道具」と環境の3つの関係から成り立っている。第2に、道具は可変的で道具の変化によって主体が変わり、そのことによって「主体—環境」関係が変わる。第3として「主体—環境」関係の変化によって環境が変わると主体が変わる。第4として、人間社会全体としては環境とかかわる主体は「身体+道具」ではあるが、社会的諸関係の複雑化と環境の道具化の傾向が強まることによって、「主体—環境」関係は個人においては「主体—道具」関係に変質する傾向が強まっている。5番目としてこの変質は3つの関係のうち、身体と環境、「身体+道具」と環境から人間を遠ざけることになる。そのことは、人間の特性の一つである「自然に意図的にはたらきかけて改変し、自身も変わる」からみれば大きな問題をふくんでいる。また協同と分配から出発した社会的な関係はその後複雑になり、社会的な不正を生み出した。環境的不公正はその具体化したものとして現れている。「良質な環境」を明らかにするためには、一方で現実の具体的で個別的な「主体—環境」関係から追求することも重要である。このような人間の起原・歴史の中で生まれた諸問題の解決・克服は、良質な「主体—環境」関係を形成する基本となる。

キーワード：良質な環境、「主体—環境」関係の変化、道具、社会的諸関係、ヒト化

はじめに

岩田（2007）は、環境教育をその目的から「環境保全主体育成」と言い換え、教育全体の目的である「人格の完成（人間性の確立）」からその位置を明らかにする試みをした。その具体的なことの中の「環境保全観の形成」のうち、「人間にとって良質な環境とはどういうものかを追求する」がその核心である。それはさまざまな角度からの追求が必要であるが、そのための基本的な方法としてつぎの三つが考えられる。

（1）現実の人間における「主体—環境」関係から探る

（2）ヒト誕生期に成立した「主体—環境」関係から探る

係から探る

（3）（2）からの歴史的過程から人間の「主体—環境」関係における本性を探る

上の（1）は具体的にはつぎの二つがある。

- a. 現実環境とどのような関係を結んだ場合、人間性を高めることができるか
- b. 現実環境とどのような関係の中で人間性に悪影響が及ぶか

上の2のaとbについて例を上げることは比較的簡単である。悪影響についていえば、大気汚染や水質汚濁など公害がそうであるし、産業廃棄物汚染、食品汚染、環境ホルモンなどの例もある。良質な「人間と環境」の例を上げれば、

里山など農村環境のなかでの自然活動を通じて子どもの成長、自然保護活動への参画を通じての若者の成長、農民の食糧生産と環境保全を重ね合わせた労働を通じての農村環境とのかかわり、近代的な進化論を築く基礎となったダーウィンのビーグル号による探検旅行なども上げられる。そもそも類人猿から人間になるまでの歴史的な過程の中でかかわった環境も、人間にとって良質の「人間—環境」関係といえよう。

都市環境には多くの問題があることが明らかにされているので、農村環境が良質な環境と考えられる傾向があるが、現代においては、すべての都市生活者が農村に移住して、商工業など都市生活の中核になっているものがなくなれば、ただちに重大な問題が発生する。現代農業は都市産業によって支えられている。大規模工業なしでは農生活は成立しない。それは人間が歴史的に選択したものである。それをくつがえすかどうかはもっとも難しい問題である。公害だけでなく都市環境に重大な問題があることは「道具の集積」論から指摘したが（岩田、2009a）、それがかりに本質的に解決不能な問題であるにしても都市から離脱することができないとしたら、現実的にそれぞれの問題ごとに解決するほかない。これは都市環境の問題だけでなく、人間における「主体—環境」関係そのものの本質的な問題であると考ええる。ならば人間の起原までさかのぼり、そこから現代までの歴史的過程を追いつつながら、人間における「主体—環境」関係の基本を明確にする必要がある。

1. 人間における「主体—環境」関係の変化

人間は類人猿といわれるオナシザル類の中のあるものを祖先にして生まれたが、その進化的過程の過渡期を経ながら、労働と協同・分配を中心とした社会性を身につけて生まれた（図1）。

これ以後、人間の生活のしかたの社会性は継承され、また発展した。人間固有の歴史性もまた社会的であるということができる。この過程の中で、人間における「主体—環境」関係にみられる二重構造に重大な変化がつぎつぎに発生した。

a. 「主体—環境」関係にみられる二重構造

「主体—環境」関係における二重構造とはつぎのようなものである。

動物を例に述べるならば、生物は、一般的に取り巻く環境のうちの特定の環境要素となる物質を感受して反応し、食糧として獲得する動植物、敵として自分を捕食する動物との関係の中で生存している。このような環境との関係の中での、ある特定の関係は「主体—環境」系といわれている（沼田、1952）。また主体の環境との関係全体の中での位置を「生態的地位」といっている。

何を感じそれに反応し、何を食べものとして捕え、どのような動物に食べられるかが、動物の生活の基本であり、からだの形態がその形式の意味をもっているから、生物は、からだの形態、生活のしかたと、この生態的地位が密接な対応関係にある時生存できることになる。この「主体—環境」系（からだの形態、生活のしかた、生態的地位の対応関係）は、それぞれの生物種によって異なり、そのことを通じて広い意味の「すみわけ」が実現され、共存している。

しかし、こうした「主体—環境」系の中で生物主体がかかわっている環境は、生物を取り巻いている環境のすべてではなく（日高、2005）、特定のものに限定されている。その生物の進化的歴史の中で遭遇することがほとんどないものや、その生存にとって不可欠の環境要素でありながら大きく変動することのないものに対しては感受する感覚はないし、反応することもない。前者の一つの例として一酸化炭素が上げられる。

これまでの進化的歴史の中でほとんど遭遇したことがないので、この物質を感じる感覚はない。無味・無臭・無色の物質というのはそうした生物の意味をふくんでいる。化学的に変化させて無毒にしたり、感じ取って忌避行動をとったりすることができず、その毒作用によって死に至ることもある。いわゆる一酸化炭素中毒である。後者の例としては大気中の酸素分子が上げられる。酸素分子も、感受する感覚がなく無味・無臭・無色である。しかし、高地や外界との大気の交流がほとんどみられない洞窟のようなところでは、酸素が低濃度であることによって呼吸困難に陥る。生物における「主体—環境」関係にはこのように二重構造がみられる。

b. 人間化に伴う「主体—環境」関係とその変化

この二重構造は人間主体においてもみられるが、それが主として主体の社会性の変化に基因して変化することに特異性がみられる。

生物においては「主体—環境」関係（生態的地位）の変化とは別種になることである。生物進化は身体の変化だけでなく、生活のしかたの変化、生態的地位の変化である。オナシザルからヒトへの進化もこの変化によって実現できた。東アフリカでの地殻変動にともなう気候変動がもとになって森林のサバンナ化が進行した。その時、それまで森林に生活していたオナシザルはこの変化に対して、対応できず「からだの形態・生活のしかた」と環境との間で、しかるべき生態的地位を確保できず滅んだものを除けば、2通りの対応のしかたをみせたと考えられる（岩田、2008）。一つは狭められていった森林の中にとどまって、それまでの生活のしかたもからだの形態も、そして生態的地位も大きく変えることなく確保して持続できたものである。もう一つは、サバンナの中に身をおき、からだの形態も生活のしかたも大きく変化させ、他の生物との新たな関係を結んで新たな生態的地位

を確保して生存できるようになったものである。

人間の祖先はこの第2の道を進んだ。その変化とは、森林時代の祖先の、葉・果実・小動物食であったものから、サバンナの中でこれに死骸食を加えた段階を経て、さらに狩猟生活を追加したものへと変化した。これは「主体—環境」系の変化である。サバンナ生態系の中の中型植物食動物であるとともに、中型植物食動物を食べ、大型狩猟動物を敵とした特異な生態的地位を確保した。こうしたサル類からアウストラロピテクス属へ、さらにホモ属への生物進化は、からだの変化であったが、生活のしかたと「主体—環境」関係（生態的地位）の変化の直接的原動力となったのは道具の製作・使用、協同・分配という社会性の誕生と発達である。

c. 「主体—環境」関係の変化とからだの変化

社会性の起原と発展はからだの変化が対応し、その生物基盤を形成することになった。道具の製作・使用の誕生と発展は、直接的には独特の「手—目—脳」系の確立である（岩田、2008）。共同狩猟・分配を中心とした社会生活には言葉が支えることになった。これには、脳の発達を媒介とする行動系「感覚器官—脳—運動器官」と結び付いた言語系「耳—言語器官—脳」系の形成というかたちでからだの変化が対応した。それは、「主体—環境」関係の認識と言語が結び付いた第二次信号系を形成することになり、社会内の相互関係の情報伝達に役立てられ、そこから個と全体、特殊と一般、偶然性と法則性、分析と総合という関係で世界を統合的にとらえる認識系を生み出すこととなった。こうしたからだの変化を生む根底になったのが直立二足歩行の確立である。

ヒト（ホモ・サピエンス）は、人間が生物的進化によってたどりついた一つの生物的结果である。人間は現在も生物的進化の途上にあると思われるが、この時点で一つの安定をみせ、別

の種に転換する兆しはつかめない。ヒト化は単なる生物的な進化ではなく、その変化には人間主体にみられる生物性と社会性の結合が大きな意味をもっていた。その意味では、人間存在にとっての社会性の意味がさらに拡大されていけば、その社会性がヒトの生物性に大きく影響して、それを変え別の種になるという可能性も視野の中に入れるべきである。

「人間にとっての良質な環境」を考える上で、生物的にはヒトにおける「主体—環境」関係を一つの基準とすべきであろう。生命の誕生以来40億年の歴史を背景に生物性が具体化しているからである。しかし、ヒトになって以後、道具と社会に大きな発展がみられ、サバンナ世界の中での生態的地位の転換は頂点に達し、ライオンなど大型狩猟動物も倒すことのできないゾウ類をも狩猟することができるようになった。そしてその後採集狩猟生活は破綻を招き（すべての地域とはいえないが）、人間は農耕生活へと生活のしかたを転換した。

3. 人間における「主体—環境」関係にみられる特質

こうした歴史的過程の中で形成された人間における「主体—環境」関係には、「人間にとって良質な環境とは」を考える上でいくつかの重要な課題がみられる。その一つは道具の問題である。道具の発達は、「身体+道具」からなる人間主体のもつ自然改変力を増大させ、人間における「主体—環境」関係を大きく変えつつある。それは身体を中心にみれば、三つの関係の結び付いたものとなった（図2）。一つは、身体と環境との直接的な関係である。第2は身体と道具の関係である。3番目は身体と道具の統一体が環境と関係するという場合である。

この中で道具が大規模化し複雑になることによって、身体と環境との直接的な関係が希薄に

なり、社会全体としては「人間+道具」と環境との関係が中心であるが、個々人にとっては、主体と道具の関係が大部分となっていることである。道具には広い意味のものと狭い意味のものがある。狭い意味の道具と機械のちがいは構造のちがいが基本になっていて、別の道具をつくるために利用するものとして、人間のはたらきかけによって作られた道具が材料である。こうみれば、道具を「人間によってある特定の目的のために改変され利用されるものであり、大きく改変することなくただちに利用可能なもの」と広くみれば、機械も材料も道具の中に入る。

道具に関する第3のこととして、観測・調査機器と認識系の発達によって人間の感知能力を高め、「主体—環境」系を宇宙全体から微小なクオークの世界まで拡大し、環境のそのものとしての起原から現在までの歴史を解明できるようになった。

道具にかかわる第4のことは、道具を中心に人間における「主体—環境」系がつぎのように三つに分化したことである。

- i. 全体が道具の集積となった世界：人間の援助なしには存続できない
- ii. 全体が人間のはたらきかけを受けて道具化する世界：人間の援助なしには存続できない
- iii. 全体が人間によって道具化されない世界：人間の援助なしに自立的に存続できる

良質な環境の京成・保全といっても、これらを一律に進めるわけにはいかない。それぞれの「主体—環境」関係における特性に対応して異なるはたらきかけをしなければならない。またこのうち「全体が人間のはたらきかけを受けて道具化する世界」とは田畑とその周辺地で、現在の変化から推定すれば、将来栽培・飼育の工業化（栽培・飼育環境の道具化）によって消失

すると予想される。人間の「主体—環境」系は、道具の集積である都市と、iiiの人間のかかわりが小さい「野生世界」に二分されるであろう（岩田、2008）。しかし、野生世界は人間の影響が軽微であり、それ自体自立的に存続できる世界であるから、その存在は人間の環境としてはきわめて重要なものである。また田畑など農村における「主体—環境」系が消失することは、それは人間主体にとって重要な損失といえよう（岩田、2009a, b）。

環境が道具の集積になることとは、「人間—環境」系が「人間—道具」系に変質することである。その問題がいかなるものであるかは岩田（2009a）で述べた。

「人間にとっての良質の環境とは」を明らかにする上でもう一つ重要な課題がある。人間の祖先であったオナシザルは群れ生活し、それが協同と分配を不可欠として京成された社会に、その後それとは別の原理が付加され、社会的な不正さが発生し増大し、その結果として環境的不公正を惹き起こした。子ども、女性、障がい者、病人、高齢者、低所得者、都市的開発が不十分な社会などに甚大な環境被害が及んでいる。環境悪化は環境的不公正さを伴い、社会的な不正を具体的に深刻なものにする。「世界中の人々がたがいに傷つけ合うことなく、幸せになる」ことが人類共通の願いであるならば、「良質な環境」もこの角度からの追求が必須である。

環境悪化に伴う「環境的不公正さ」はこれまでいわれてきた公害のようなかたちとは別に、都市環境でみられるように、環境が道具化されることによってその所有者のみが良質の環境として享受し、他の人々にとっては環境悪化となる場合が出てくる。小原（1984）のいう「自己家畜化論」は、農耕生活以後人間には環境の人為化にともなって自ら造りだした環境の中に生活するとそれに対応して自身を変えろという現

象がみられる。それは人間社会全体からみればそのとおりであるが、社会的な不正さの中では、ある個人あるいは特定の集団によって良質なものであるとしてつくられた環境は他のものにとっては強制された環境になり、それに順応せざるをえない場合もある。それは単なる家畜化にすぎず、「自身が造りだした環境の悪影響を受ける」という意味の環境疎外とは別の問題である。しかしそれでもなお、これは社会全体の問題とみれば、環境疎外ということも否定できない。

おわりに

「良質の環境」はあるのではなく、人間の課題としては人間と環境との関係の中で形成されるのであるから、「良質な人間と環境との関係」と言いなおすべきであろう。人間における「主体—環境」関係は可変性が強いからである。

また人間にとっての環境はそれ自体は自然であり、われわれ人間の意識を基盤として形成した理とは異なる理に則して存在している。その意味で自然は自己運動的に存在しているから、主体と環境を同じ自然であるということ、同じ生きものであることを前提にしながらも、環境としてある自然を他者としてみるのが重要な視点となる（岩田、2008）。だからこそ有用性を通じてかかわっている道具とは異なる、「なまの」自然としての環境とのかかわりが大きな意味をもつのである。

引用文献

岩田好宏. 2006. 人間学の問題としての動物. 小原秀雄編著. 『生命・生活から人間を考える』. 学文社

岩田好宏. 2007a. 環境保全主体育成としての環境教育. 『日本 環境教育学界関東支部年報 No. 1』

岩田好宏. 2007b. 環境論ノート. 『環境思想・教育研究』 創刊号

岩田好宏. 2008. 『「人間らしさ」の起原と歴史』. ベレ出版

岩田好宏. 2009a. 子ども・都市環境論序. 『日本環境教育学界関東支部年報 No. 3』

岩田好宏. 2009b. 子どもと農村の自然. 『環境思想・教育研究』 第3号

小原秀雄. 1984. 『人間をどう観るか②自己家畜化論』. 群羊社

戸田 清. 1994. 『環境的公正を求めて』. 新曜社

沼田眞. 1958. 『生態学の立場』. 古今書院

日高敏隆. 2005. あとがき. ユクスキュル (日高、羽田節子訳) 『生物から見た世界』. 岩波書店

	サル類段階	過渡期	人間段階
生物進化		アウストラロピテクス属	ホモ属
社会的変化		道具の製作と使用	協同と分配 言語の起原
生活の基本	採集植物食・小動物食	＋死骸食	採集・狩猟

図1 人間の起原における生物性進化・社会的進化（岩田（2006）を改変）

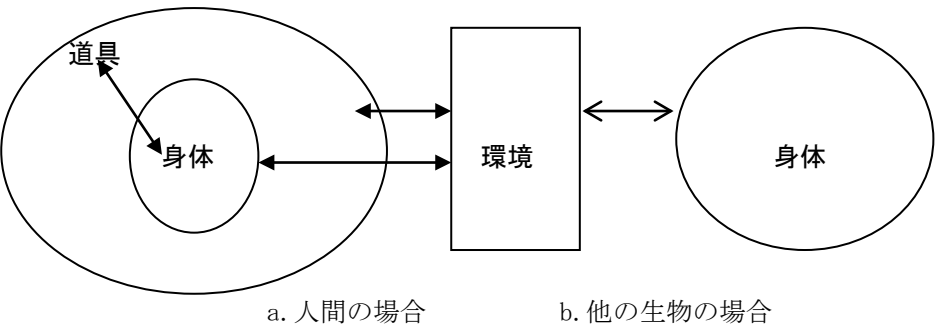


図2 人間と他の生物における「主体—環境」関係